

高山市上宝町在家採集の多頭石斧片など ～江口英夫コレクションより～

長屋 幸二

Introduction to a fragment of multi-head stoneax and some materials collected at
Zaike Kamitakara-town Takayama-city
～From EGUCHI Hideo collection～

Koji NAGAYA

はじめに

当館の収蔵資料には、研究活動の俎上にあがらない未報告資料がある。平成16年(2004)より人文展示室1洞窟ジオラマ内に常設展示している多頭石斧もそのひとつである。多頭石斧の集成は吉朝乗富氏らによってなされているが、当資料は反映されていない¹⁾(吉朝1987)。今後の研究に資するため、図化し紹介していきたい。

1. 採集場所・採集状況

今回紹介する資料は、登録番号A-423「上宝村在家出土石器類 江口英夫氏採集資料」の一部である。当資料は石製土掘具6点、打欠石錘2点、切目石錘1点、磨製石斧1点、石刀1点、多頭石斧1点の12点からなり、土器などは含まれない。各資料に採集地と採集年が採集者により注記されており、それによるといずれも採集年は昭和12年(1937)である。江口氏の(旧)上宝村内におけるコレクションには「本郷平(登録番号A-420)」「蔵柱(同A-421)」「吉野(同A-422)」「上宝村」と注記された資料があるが、採集日の注記は全て昭和12年となっている。

採集地である在家は、高原川流域では最も発達した本郷の河岸段丘にある。段丘面は4面あり、当遺跡の乗る本郷面は最も高位の段丘である。岐阜県遺跡地図にはG07K00335在家遺跡(岐阜県教育委員会1990)が登録されており(北緯36°17' 東経137°22' 標高約630m)、この近辺で採集されたものと思われる。

在家遺跡は古くからその存在が知られ、縄文時代中期後半を中心とする土器片等が得られている。また、旧石器時代のナイフ形石器も得られている。周辺には宮の横遺跡(G07K06573:上宝村史では桂本神社周辺遺跡)、本郷内野遺跡(G07K00334)などが広がるが、いずれも縄文時代中期後半を中心とする遺跡である。(本永2005)

江口コレクションについては既に述べたことがあり

(長屋2005)、簡単にまとめておく。採集者である江口英夫氏は昭和の初め頃より長く岐阜県職員として勤められ、赴任地を中心に県内各地で考古資料を採集された。採集品には採集日と採集地を明記しており、来歴のわかる貴重な資料となっている。江口氏が亡くなられた後、1400点余の資料が御遺族より当館に寄贈された。平成5年(1993)以降のことである。

2. 資料紹介

多頭石斧、石刀、打欠石錘各1点を図示した。

1は多頭石斧の破片である。斧部の軸がほぼ90°ずれることから四頭石斧であろう。黒色で緻密な石材を用いている。緻密な熔結凝灰岩か変成度の弱い泥岩のホルンフェルスであろうか。

斧部の中央に、円い断面で深さ1.8mm程の樋が縦走する。樋内には縦位に擦痕も認められ、先の円い工具による擦り整形である。裏面は扁平で、表面は中央に向かって盛り上がる表裏非対称の断面形状である。表裏とも擦痕が残るが、表面に残る擦痕は少なく縦横斜めと多方向に走る。擦痕は総じて短く、細かな作業が行われた様子がうかがわれる。一方、裏面の擦痕は全面に粗く残り、図の上斧部は横位、右斧部は斜め方向に走る。斧部側縁はほぼ垂直に丸みを持ちながら加工されるが、股部は中央孔に向かって角度を持って深く擦り込んでいる。側縁、股部とも、擦痕が目立たない滑らかな工具による研磨加工である。刃縁は円く、図の右刃端部には幅2mmほどの面取りもみられる。

中央の孔は裏が広く表が狭まるよう敲打によりロート状に整形される。敲打痕は一つ一つが小さく密で、2cmの深さをもつ狭い孔内に施されることから、細く尖った工具が用いられたと考えられる。環状石斧や多頭石斧の中央孔は、表裏両面から加工され断面が><状を成すものが一般的で、中には錐状工具による回転擦痕が残るものも見られることから、当資料の孔は特異といえる。断面の形状、仕上げ研磨の差異とともに、表裏の区別を明

確にする意図が強くうかがわれる。

図の上斧部長45mm。右斧部長42mm。中央孔の径は推定27mm。全体の径は推定114mmほどとなる。

最大厚20mm。残存部の質量128g。

多頭石斧は縄文時代の終わり頃から弥生時代にかけて、東日本を中心に見られる。当資料の刃部面取りからうかがわれるように実用的なものではなく、中央の孔も柄に装着するには不適當な形状をしている。象徴的な意味を有した石製品であろうと考えられる。

吉朝の集成によれば、飛騨では三頭石斧が12点と多く、宮峠以北の広い範囲に分布している。一方、四頭石斧は当資料を含めて3点に過ぎない。1点は詳細不明。もう1点は上宝町蔵柱下垣内遺跡の採集品であり、今のところ分布範囲も限定的である。

2は石刀とした。砂岩製。表裏面に剥離の痕跡が残るが研磨に切られる。剥離による粗加工の後に研磨整形されたようである。全面研磨に覆われるが、擦痕は観察できない。滑らかな砥石による研磨であろう。研磨面のなす稜は明瞭で、作業は滑らかではなかったようだ。右端は折損。左端は研磨により面取りがなされるが、広さ・角度など不揃いな複数の面からなる。上辺は面取りがなされ棟となり、下辺は刃縁状に尖る。上下辺とも湾曲し、平行とならない。不整形な石刀である。

長さ84mm（折損部まで）、幅36mm。最大厚11mm。残存部の質量56g。

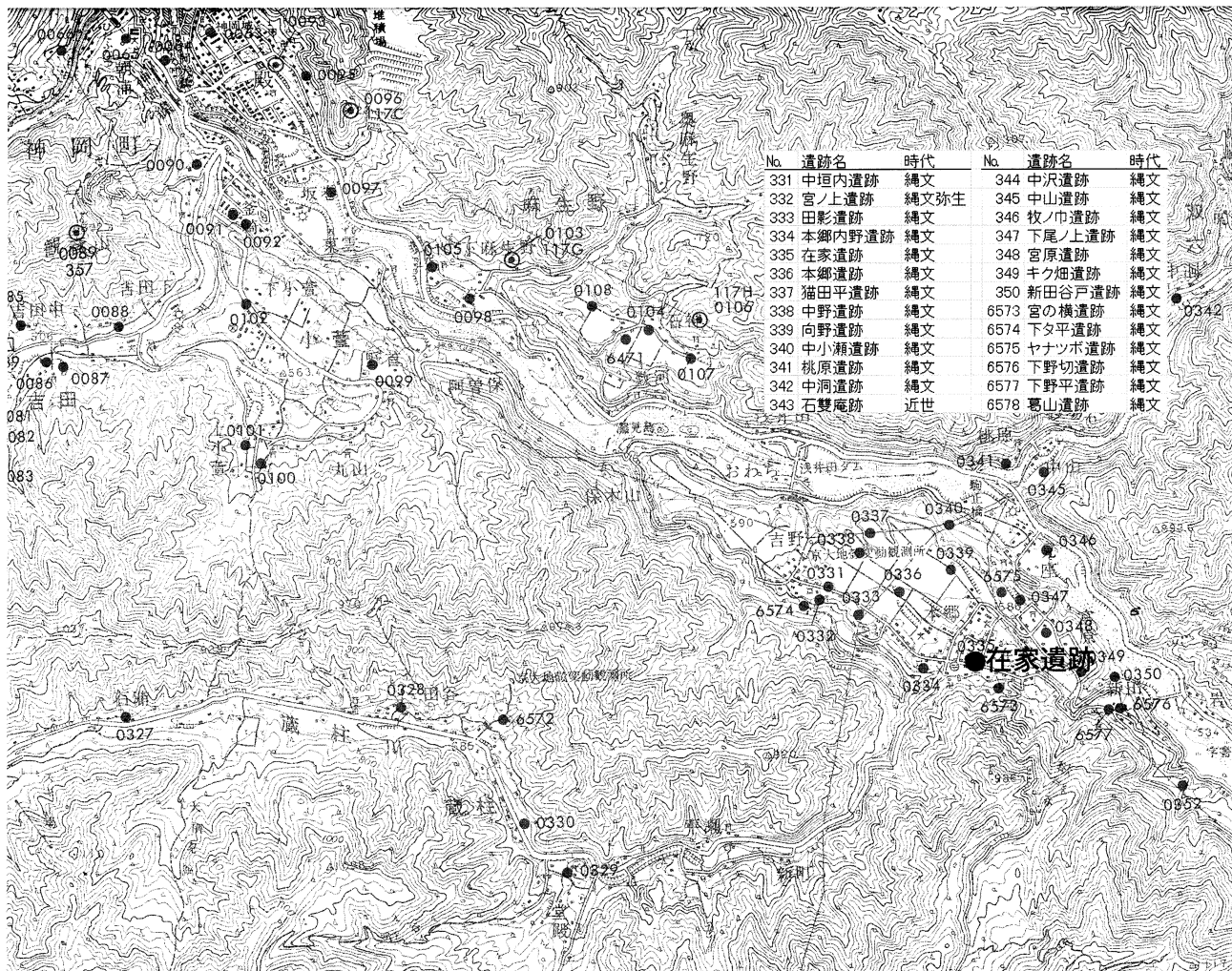
3は打欠石錘。扁平で高な濃飛流紋岩の円礫の短軸にひも掛け部を設けている。ひも掛け部は敲打と抉り削るような加工により作られている。切目石錘のような、鋭い工具による深く断面がV字状となる加工ではなく、浅く幅広の抉りである。長軸62mm。短軸47mm（ひも掛け部では44mm）。最大厚19mm。質量77g。サイズの大きな石錘では短軸にひも掛けを設けることがあるが、このサイズではあまり見られないことから図示した。

註

- 1) 集成の中で、「四頭石斧は、環状石斧に切目を加えた形状のものと、十字型石斧に孔を備える形状の2種類が各1点ある。後者はもう1点、出土例の増える可能性があるが、今回は確認し得なかった」とある。未確認の1例は当資料であろう。

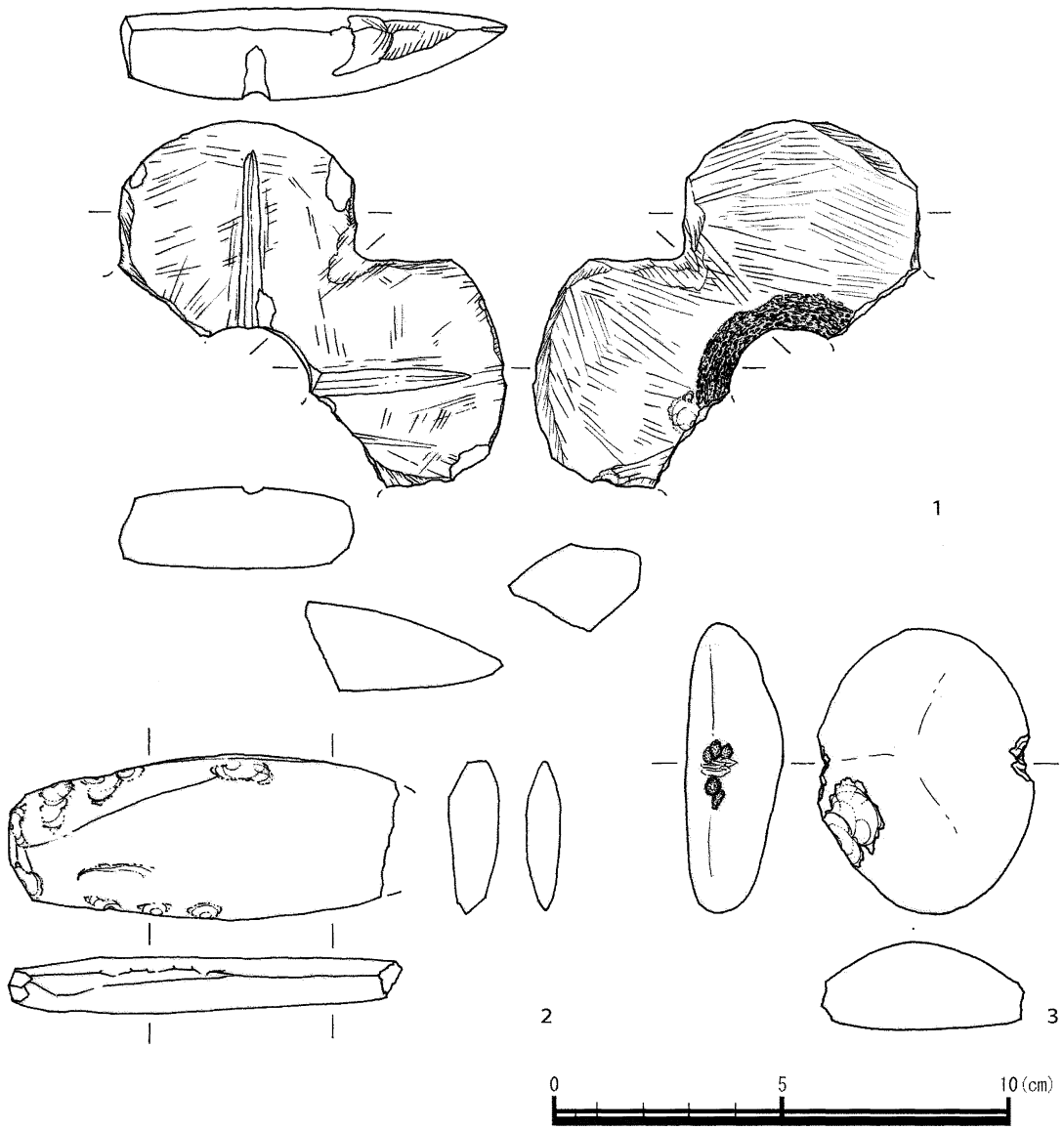
引用・参考文献

- 岐阜県教育委員会1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』
 長屋幸二 2005「石製土掘り具の製作者」『岐阜県博物館調査研究報告』26号pp.5-6
 本永義博 2005「上宝村の遺跡」『上宝村史上巻』pp.46-48
 吉朝乗富 1987「環状石斧・多頭石斧集成」『飛騨の考古学遺



第1図 在家遺跡位置図

岐阜県教育委員会1990『改訂版 岐阜県遺跡地図』「岐阜7船津」に加筆 scale1/50000



第2図 在家採集の石器



第3図 多頭石斧（表面）：左



中央孔敲打跡痕（上面が裏）：右